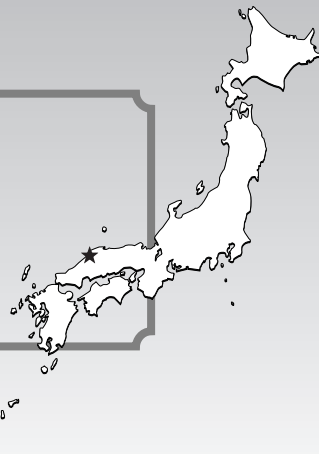


新版 全国衛生研究所見聞記 【其の九】 島根縣保健環境科學研究所之巻



無言の宍道湖

何を隠そう探訪子は島根縣の出身である。今回の訪問先、島根縣保健環境科學研究所（以下『島根保環研』と略す）の所在地である此の松江市で高等学校時代の3年間を、その前は大原郡木次町という奥出雲の田舎町で中學卒業までの15年を過ごした。奥出雲の山猿が松江市という「都會」へ出る途中には宍道湖という「広い海」があった。即ち、木次から北上して宍道湖にぶつかり、東に直角に曲がれば玉造温泉や松江市方面に、西に直角に曲がれば亡父の實家がある斐川町や出雲市に至るのだった。恥づかしくも泳げない所為で本物の海を畏怖していた探訪子は、此の静かで優しく寂しくさえある偽物の海が心底大好きだった。



寫眞1 某年某月某日の宍道湖（三代俊治撮影）

宍道湖と云えば憶い出す人物が一人居る。下宿しながら通った松江北高の同期・別級に、野尻和正という秀才が居た。敢えて弊衣破帽と評するほどでもないが、素足に下駄を履いて闊歩する姿は、少なからずバンカラ風ではあった。校帽は勿論破れていた筈だ。彼は文系、探訪子は理系だったから昵懇の付き合いはなかったものの、何故か氣になる存在であ

り續けた野尻は、京大を卒業して何處かの會社に就職した後、大阪の北野高校の國語教師になり主に漢文を教え、型破りの名物教師として生徒からも同僚からも敬愛されていたが、不幸にも膵癌という病魔に冒され、2002年の暮、齡54にして生涯を閉じた。後日、然様な野尻の死を知らずに居た探訪子の手許に突然届いた追悼文集には、彼が顧問を務めていた北野高校圖書部の月報か何かに寄せた野尻獨特の文章が、遺稿の一つとして轉載されていた。愚かにも最近斷行せる引越の際に其の追悼文集を紛失してしまったので、今は記憶に頼るしかないが、其の文章に野尻は宍道湖のことを書いていた。彼は安來（やすぎ＝松江の東、米子の西）の出身で探訪子同様に越境入學生だったから、我々は松江市内中學出身者の持たない特別のリセプターを、宍道湖に對して共有していたに違いない。

あれから無慮40有餘年の歳月が流れ、2008年4月16日の今日、好漢野尻は既に此の世を去り、老殘三代は「妙な副業」で今から宍道湖北岸の島根保環研を訪れようとしている。斯様な人生の將來を、あの頃の俺達は寸毫も想像しなかった筈だぞ、野尻！…… 雨混じりの曇天の下、松江市内から浜佐陀町へと西進するタクシーの左窓に映る宍道湖は、無言のうちに探訪子に何かを語りかけている風情だった。嗚呼！そうか、全く以て野尻があの記事の末尾に書いていたとおりなのだ。人生の行く末は、實に「端倪す可からざるものがある」。

やがてタクシーが目的地に到着し探訪子の回想にも終止符が打たれた。島根保環研の建物は御多分に漏れず古いことは旧いが、一風變った趣きがある。建物中央の玄関に到達するには20段位の階（きざはし）を昇らねばならぬ。この構造は出雲大社を模したのだろうか。

(I) 出雲人でありながら出雲時間を守らず 定刻に到着した探訪子の無禮を御許容 頂いた大城等所長の出自は沖縄

玄関まで出迎えてくださった田中貞光調整監と探訪子との間で交わされた、出雲辯まじりの、三代「すみません、遅れずに来てしまっ」

田中「いや、よございすよ」

三代「おちらとしましょか？」

田中「いまだき出雲時間も何もあーしまへんわね」

という意味不明の會話に眼を

白黒させるモダンメディア編集部員二人（大森、牛久保）

を尻目に、田中調整監に案内されて入室した所長室では、大城等（おおしろ・ひとし）先生が既に我々を待っていてくださった。



写真2 田中調整監



写真3 着任早々の大城等所長。其の所為なのか非出雲人だからなのか、古参所員に囲まれた中では少々縮こまって見えた。

大城所長の前任地は雲南省の保健所だったとの由。「ほんなら木次ですね」と、つい出雲辯が出てしまう探訪子。「そうです。先生の生まれ故郷の木次に私は居ました」と、出雲訛が微塵も含まれぬ標準語で御答えになる大城先生は、その發音のみからしても絶対に地元の出身ではない。自身は大阪生まれだが親は沖縄。大城という姓が既に充分に其れを示唆しているとおりであった。

姓だけではない。顔も あっ、前回の山形衛

研探訪記の中で、「阿彦所長は、これまで出逢ったどの衛研所長よりも遥かに若く、且つ遥かに美男子であった」と探訪子は書いたが、あんなことは書かねばよかった。少なくとも「美男子」という言葉だけは絶対に使うべきではなかったと、目の前に座す大城先生の甘いマスクに見惚れながら探訪子は痛烈に後悔した。男の顔を審美的觀點から眺めては絶対に不可い。山形衛研の前に訪れた和歌山衛研の岩井敏明所長、沖縄の平良健康所長、愛知の宮崎豊所長、神奈川の今井光信所長の諸先生方に平身低頭して謝らなければならない。しかし探訪子の罪はもっと深い。沖縄衛研の平良所長には「會ってさえいなかった」のだ。冷汗三斗の思いである。

探訪子の然様な心中を察してか大城先生が助け舟を出してくれた。「私は所長になったばかりなのですが、着任早々にこのような『視察』という大仕事があると聞いて、實は大變緊張してるんです」。..... これは非常に含蓄あるツッコミだった。..... 「とんでもないですよ、『視察』なんて大仰なものじゃ全然ないんですから」と聲には出しつつも、探訪子の心は再び内向してしまった。訪問する側にとっては『探訪記』の取材でしかない氣楽な訪問であっても、訪問される側にとっては恰も『視察』を受けるが如きストレスフルなイベントであることに、いま初めて氣がついた。探訪子は亦しても反省を強いられた。これまで訪れた山形、和歌山、沖縄、愛知、神奈川の諸衛研の皆様方に、私（と同行者）の無神経な天気を心から御詫び申し上げる。

誰かの咳拂いが聞こえ、續いて「では先ず私から島根保環研の概要あるいは特色を御説明致しませう」という大城所長の聲がした。「概要」は他處に譲り、此處では「特色」についてのみ少々書き留めておきたい。「縣民ニーズに應じた試験研究」という言葉が大城所長の口からも聞かれ、關係書類の誌面各所に繰返し書かれてもいることからして、島根保環研の第一義的存在意義は「島根縣の衛研である」ことに立脚していることが明々白々である。實にこれは所謂「地方衛研」の大義以外の何物でもないから、敢えて其れを「特色」と呼ぶには當たらない。にも拘らず、探訪子には其れが島根縣に特別の特色のように思えてしかた

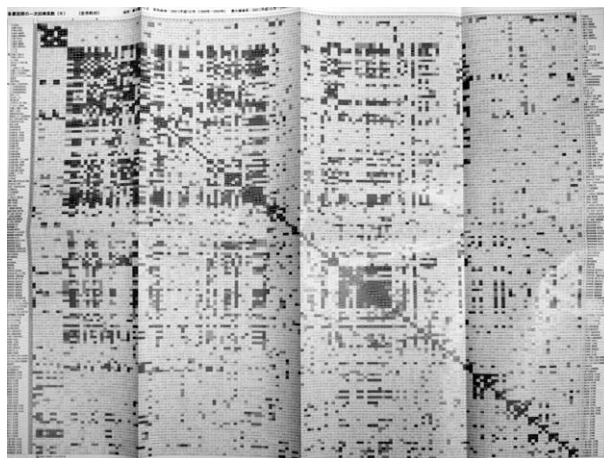
がない。島根県民、特に出雲地方在住の県民は、意識するとせざるを問わず、島根を獨立國と捉えているフシがある。主にそれは歴史と言葉の所為だ。歴史に関する蘊蓄は他處に譲るとして、言葉に関してのみ一言云えば、例えば今回の訪問に随行せるモダンメディアの御二人は、タクシーの運ちゃんの話す言葉が「外國語にしか聞こえなかった」のである。言葉が外國語なら、其の言葉が話されている地域は立派に外國なのである。島根保環研玄関の階段が出雲大社を想起させた餘波なのだろうか、今度は「縣民ニーズ云々」からオオクニヌシの國譲りを探訪子は想起してしまった。嗚呼、今回は雜念・妄想過多につき一向に筆が（本道を）進まない。

（Ⅱ）健康壽命日本一を達成する為の膨大な調査研究資料と藤谷明子主幹の熱辯に壓倒される

島根は云わずと知れた老人縣。必然的に、「縣民ニーズ」のうちの少なからざる部分が「老民ニーズ」である。

よって縣は、1999年策定の「島根縣保健醫療計画～しまね健康プラン～」に於いて、其の基本目標の一つを「65歳以降の人生を健康な状態で生きて行くことが出来る“健康壽命（平均自立期間）”を男女とも全國一にする」に設定し、それを受けて島根保環研（の総務企画情報グループ）は、驚嘆すべき眞摯勤勉さを以て調査研究活動を續けて來た。例えば「島根縣に於ける健康壽命の地域格差に関する研究（2000－2001年度）」、「島根縣に於ける健康壽命の改善に関する研究（2002－2004年度）」、「健康壽命の改善に於ける經濟的効果對策事業（2005－2007年度）」等の調査研究事業を通じて得られ蓄積された膨大なデータ（數字）には眼の眩む思いがする。

參ったなあ。元來探訪子は此の手の數字に弱いのだ。否、それ以前の問題として、所謂統計疫學というやつにアレルギーがある。きっとそのうち、障害調整生命年（DALY）とか、早期死亡による餘命損失（YLL）とか、障害による餘命の損失（YLD）等といった疫學用語も飛び出して來るだろうから、藤谷明子主幹の熱辯に壓倒されつつも、探訪子のgrey cellsに睡魔が襲いかかって來るのは最早時間の問題と思われた。



		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
平均寿命	1	1.00	0.32	0.28	-0.04	0.09	0.07	0.13	-0.11	0.12	0.03	0.02	0.02	-0.03	0.09	0.02	-0.00	-0.03	-0.06	-0.09	-0.09
65歳平均余命	2	0.32	1.00	0.82	-0.04	0.22	0.75	0.14	-0.15	0.26	-0.10	-0.10	0.20	0.19	-0.20	0.13	-0.10	-0.01	0.23	0.06	0.00
65歳自立期間	3	0.28	0.82	1.00	-0.61	0.73	0.61	0.89	-0.67	0.76	-0.10	-0.10	0.18	0.17	-0.24	0.11	-0.10	-0.01	0.20	0.05	0.00
65歳要介護期間	4	-0.04	-0.04	-0.61	1.00	-0.99	-0.02	-0.78	0.98	-0.92	0.04	0.04	-0.04	0.03	0.15	-0.02	0.03	0.03	-0.04	-0.02	0.00
65歳自立期間割合	5	-0.09	0.22	0.73	-0.99	1.00	0.15	0.85	-0.88	0.99	-0.05	-0.05	0.07	0.07	-0.18	0.03	-0.04	-0.03	0.08	0.03	0.00
75歳平均余命	6	0.15	0.71	0.71	-0.15	0.22	0.00	0.63	-0.24	0.19	-0.16	-0.16	0.25	0.21	-0.26	-0.07	-0.15	-0.02	0.27	0.10	0.00
75歳自立期間	7	0.13	0.67	0.78	0.00	0.66	0.91	1.00	-0.80	0.85	-0.11	-0.11	0.16	0.14	-0.26	0.03	-0.15	-0.01	0.20	0.04	0.00
75歳自立期間割合	8	0.03	-0.10	-0.09	0.93	-0.94	-0.22	1.00	-0.99	0.01	0.01	-0.01	-0.01	0.14	-0.10	0.01	-0.01	-0.04	0.02	-0.00	0.00
人口計	9	0.01	0.05	0.02	-0.03	0.04	0.00	0.77	-0.97	1.00	-0.94	-0.94	0.05	0.05	-0.18	0.08	-0.09	0.00	0.08	-0.00	0.00
人口男	10	0.08	-0.06	-0.05	-0.01	0.00	-0.04	-0.02	0.02	1.00	1.00	-0.02	0.02	0.82	0.19	0.89	-0.03	-0.84	-0.02	-0.00	0.00
人口女	11	0.08	-0.06	-0.05	-0.01	0.00	-0.03	-0.02	0.02	1.00	1.00	-0.02	0.02	0.82	0.19	0.89	-0.03	-0.84	-0.02	-0.00	0.00
65歳以上割合計	12	-0.00	0.20	0.19	0.01	0.03	0.14	0.11	0.01	0.02	0.01	0.01	0.01	0.99	-0.74	-0.01	0.01	0.01	0.71	0.84	0.00
65歳以上割合女	13	-0.00	0.24	0.20	0.06	-0.01	0.16	0.11	0.05	-0.01	0.01	0.01	0.01	0.98	1.00	-0.73	-0.01	0.01	0.69	0.87	0.00
人口密度	14	0.14	-0.06	-0.06	-0.01	-0.00	-0.11	-0.11	-0.01	-0.02	0.82	0.82	-0.74	-0.73	1.00	0.26	0.79	0.19	-0.71	-0.00	0.00
女100人につき男人数	15	-0.05	-0.06	-0.06	0.06	-0.07	0.13	0.04	0.17	-0.12	0.19	0.19	-0.02	0.01	0.26	1.00	0.17	0.17	-0.71	-0.00	0.00
世帯数	16	0.07	-0.06	-0.06	-0.02	0.01	-0.03	-0.01	-0.03	0.02	0.99	1.00	-0.02	0.01	0.79	0.17	1.00	-0.09	-0.64	-0.27	0.00
一世帯あたり人数	17	-0.00	0.02	-0.01	0.14	-0.12	0.08	0.03	0.09	-0.06	-0.03	-0.03	-0.03	0.00	0.20	0.33	-0.09	1.00	0.18	-0.84	0.00
65歳以上の世帯割合	18	-0.07	0.23	0.18	0.11	-0.05	0.20	0.13	0.08	-0.01	-0.84	-0.84	0.71	0.72	-0.10	-0.25	-0.44	0.18	1.00	0.31	0.00
65歳以上の独居割合	19	0.02	0.06	0.09	-0.09	0.09	-0.09	-0.02	-0.06	0.03	-0.32	-0.32	0.84	0.79	-0.10	-0.25	-0.44	0.18	0.31	1.00	0.00
65歳以上のいる5人以上世帯割合	20	0.03	0.08	0.04	0.11	-0.08	0.13	0.08	0.07	-0.03	-0.10	-0.10	-0.10	-0.10	0.08	0.28	-0.18	0.96	0.31	-0.74	1.00
就業者	21	0.08	-0.05	-0.04	-0.01	0.00	-0.03	-0.01	-0.02	0.02	1.00	1.00	0.00	0.00	0.82	0.20	0.93	-0.82	0.64	-0.00	0.00
就業率割合	22	-0.03	0.26	0.24	-0.03	0.12	0.40	0.24	-0.06	0.19	-0.14	-0.13	0.09	0.13	-0.17	0.31	-0.16	0.20	0.21	-0.21	0.00

写真4 上圖の左上隅を拡大したのが下圖である。上圖二次元座標空間上の1點1點が實は數字から出來ていることに驚いて頂きたい。何が何だかわからないが、とにかく凄い。



写真5 背筋伸ばして滔々と延々と健康壽命研究について語る藤谷明子主幹。

だが、幸運にも豫想は外れた。藤谷女史の口からは探訪子が恐れていたヘンチクリンな疫學業界用語は飛び出して來ず、「健康壽命」という優しい言葉

が全編を貫き、テクニカルタームとしてはせいぜい「平均自立期間」という許容可能なものに留まっていたからである。助かった。

しかし、氣楽になった探訪子は、ここでまた大失態を演じてしまう。「あ、そうですか、雲南市は健康寿命が長いほうなんですか」、「そうです、男性も女性も上位に来てます」、「実は私の母は雲南市で獨り暮らししてるんですよ」、「そうだそうですね」、「86歳になるんですけども、元気です。下手に同居して面倒見るよりは、獨りで放っておいた方が健康寿命が長くなるんじゃないですかねえ、ウワッハッハ」、「……………」」。當然の如く、賛同者皆無で、座は見事にシラけた。



写真6 藤谷主幹の左隣は吉田年男課長。他は既出。

(Ⅲ) 保健科学部の福島博部長はエルシニア研究の大家

細菌・ウイルス・食品化学の3つのグループを束ねる保健科学部の福島博部長は、1980年頃から開始したエルシニア研究で優れた業績を挙げて「島根衛研に福島あり」と衆目を集め、爾來、研究対象領域をジワジワと拡大させ、部下の指導・監督にも励みつつ、着々と先端的成果を生み出し續けて來た「プロの微生物屋」である。明日(4月17日)から此の松江市で開催される第82回日本感染症學會總會に於いても、シンポジストの一人として「細菌性食中毒のReal time PCR法による網羅的迅速スクリーニング」と題して講演することになっている(あっ、憶い出した。今回の島根保環研訪問日が、當初豫定の4月17日から4月16日に急遽變更されたのは、島根保環研のエースである福島先生が感染症學會参加の為に不在になることが判明したからだ)。)

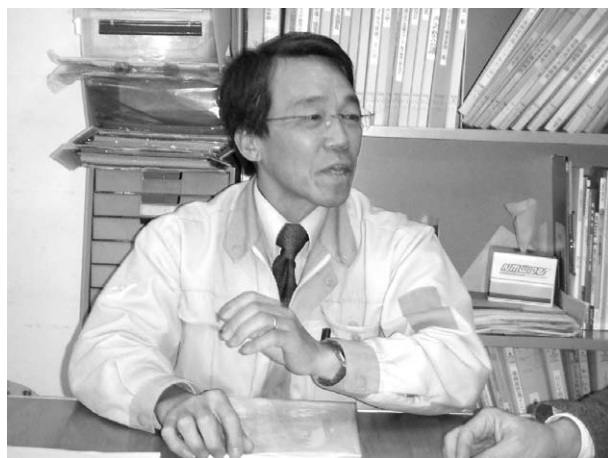


写真7 福島博部長の今と…………。

近著論文(Fukushima H et al. Rapid separation and concentration of food-borne pathogens in food samples prior to quantification by viable-cell counting and real-time PCR. Appl Environ Microbiol



写真8 ……昔。参考文献¹⁾より。

2007)の別刷を讀ませて頂き、續いてパワーポイントの印刷ドラフトを用いての懇切丁寧な説明を聞かせて貰いながら、此の研究成果(=試料濃縮法と網羅的迅速スクリーニング法)の實用性・技術性の高さに感心するばかりの探訪子であった。これまでも、行く先々で同じ感懷を持ったにも拘らず、今日も復た同じ感想を書き留めておかざるを得ない。「地方衛研」の底力は實に侮り難いものがある。

福島部長の後に、細菌の黒崎守人科長、ウイルスの保科健科長・田原研司専門研究員、食品化学の持



写真9 左から保科健科長と黒崎守人科長。他は既出。



写真 10 左から二人目は持田恭主席研究員。
右端は来待幹夫専門研究員。他は既出。

田恭主席研究員・来待幹夫専門研究員からも夫々の研究テーマ毎に熱の籠った御話を伺ったが、不謹慎にも探訪子は詳細をすっかり忘却してしまった。

否、忘却したのではなく、多分、上の空（うわのそら）で聞いていたに違いない。明日の感染症學會で喋るのは福島部長だけでなく田原専門研究員もそうなのだが、御兩人とも明日の発表のスライドが既に見事に完成しているのを見るにつけ、探訪子は次第に心穏やかでなくなって来ていた。感染症學會会長の富岡先生から招かれ、明日の午前中のシンポジウムで肝炎ウイルスについて喋ることになっているのだが、スライドの準備が全然できていないのだ。一寸ヤバイ。

（Ⅳ）環境科学部：部長室にて

ラボを訪れる前に部長室に立ち寄った。其處では橘親男部長と2～3分話を交わした筈であるが、何を聞き何を喋ったか全く記憶にない。

橘部長が大根島（＝中海に浮かぶ小島）出身である旨の記憶はあるが、それはアフターファイヴに聞いた話であって、部長室での話ではない。しかし、探訪子を absent minded にした原因は明瞭に分っている。石飛裕調整監の不在が探訪子の心を「氣も漫（そぞ）ろ状態」にしたのである。デスクは其處にあるのに當人の姿が其處にない。姿がなかった証拠に、モダンメディア派遣カメラマン二名の撮影帖にも石飛調整監の写真は一葉だに見当たらない。

何を隠そう（←このフレーズ多用失禮）石飛調整



写真 11 大根島出身の橘親男部長。

監と探訪子は松江北高の同期同級の旧知である。彼に逢うのを楽しみにして来たから、あてが外れた。きっと、シャイな石飛のことだから、雪隠に雲隠れしているのだろう、などと強いて冗談めかして己れの説得を試みるも無駄だった。実際には後で会うことが出来たから、どうってことはないのだが、其時は少なからず動顛して損をした。

旧友を心配させた石飛は悪い奴だ。懲らしめに昔話を一つ披露する。高校三年の或る日、漢文の授業で「濯濯（たくたく）」という漢語を教わった。草木の生えない様。轉じて、光り輝く様を意味する場合もあると、確か宍道先生から教わった。其の日のうちに『濯濯會』という親睦會が結成され、會長は石飛裕だった。彼の頭が級友中最も濯濯だったからである。あれから無慮40年、宍道湖淡水化問題等の辛い修羅場をも経験し、今の彼の頭は益々濯濯に磨きが掛かっている。モダンメディアのカメラマン達が石飛調整監の顔写真を一葉も残さなかったのは、武士の情けだったのかもしれない。

（Ⅴ）環境科学部：大氣環境グループ

島根縣上空の大氣の状態は東亜細亜のそれと密接に繋がっている。「北京でチョウチョがはばたくと、遠く離れたニューヨークでハリケーンが生じる」とはカオス理論の譬え話だが、酸性雨や黄砂の飛來に比喩は要らない。

計13カ國が参加する東亜細亜酸性雨ネットワークの定點観測地點として島根縣内には隠岐と蟠竜湖の二カ所（因みに日本全國では11カ所）が存在し、

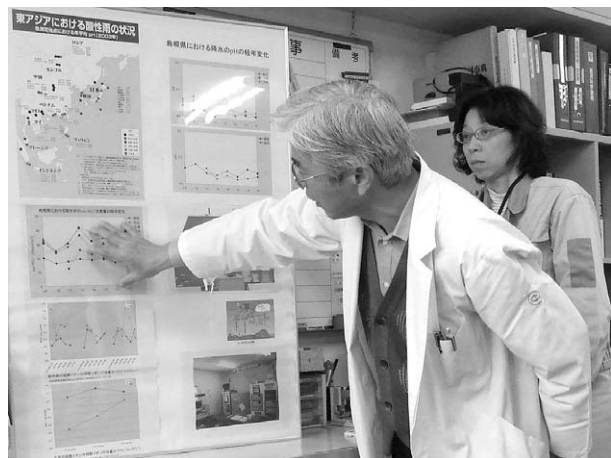


写真12 酸性雨調査研究について解説する多田納力科長。
その右は黒崎理恵専門研究員。



写真14 中央多田納科長の左は佐川竜也主任研究員、
右は荒木卓久専門研究員。他は既出。



写真13 敷地内にある国設松江大気環境測定所。
その裏側にライダーがあり、レーザー光を上空に
向けて発射し、浮遊微粒子からの反射光を測定する。

大気中有害物質長距離輸送の機構を解明する為の国際的共同研究に一役買っている。黄砂については、環境省の肝煎りで「ライダー」なる観測装置を設置し、空中微粒子のモニタリングを行っている。

多田納科長率いる此の大気環境グループは、以上の如き調査業務の他に、「島根県に於けるオキシダント高濃度事象に関する研究（2006－7年度）」と題する研究的業務も行っており、偶々その研究期間中の2007年5月8－9日には、類い稀なる光化学スモッグを観測し、国立環境研等との共同データ解析によって、この現象が、中国からの「越境汚染」である可能性が高いことを突き止めた。實に地域は大気で繋がっている。

（Ⅵ）環境科学部：水環境グループ

後藤宗彦科長からは「宍道湖で発生したカビ臭物質の動態に関する調査研究」の話、神谷宏専門研究員からは「斐伊川流域に於ける負荷量の長期的變遷の把握に係る予備的研究」の話を伺った。



写真15 後藤宗彦科長。 写真16 神谷宏専門研究員。

宍道湖は飲料水の水源ではないが、特産のシジミのことを考えると、カビ臭の問題は看過できない。2007年の5月上旬に（.....ん？、時恰も上述した光化学スモッグ発生の際と同様だが、何か関係があるのだろうか.....）宍道湖周辺でカビ臭が発生した。採水して分析したところ、臭いの原因はジェオスミンであることがわかり、湖底の泥からはジェオスミン産生放線菌が検出されたという（後記参照）。細胞毒性試験や魚毒試験や變異原性試験の結果、ジェオスミンの生物毒性は低いと結論し得たものの、シジミにカビ臭があるのは矢張り気持ちがいいもので

はない。第一シジミの商品価値も下がるだろう。何が原因でジェオスミン産生放線菌が増殖するのか、あるいは増殖不変でジェオスミン産生だけが亢進するのか、それには大気汚染の影響等はないのか、徹底的に追求されるべきであろう。人為的淡水化という最大の危機を乗り切ったとはいえ、油断は禁物だ。

次いで聞かされた斐伊川の話は探訪子を再び回想の世界へと誘った。50年前、斐伊川中流の河川敷には砂がふんだんにあった。其處（＝「浜ゴ」と呼んだ）で子供達は野球をして遊んだ。川遊びもした。泳げる者は泳いだ。しかしそのうち、上流にダムが出来て、放水時には泳げなくなった。農薬が盛んに使われるようになって、放水時でなくとも泳げなくなった。何故か「浜ゴ」の砂が砂取り業者によって持ち去られ、野球をする場所も無くなった。昭和30年頃から、あっという間に然様な変化が斐伊川を襲った。誰も「ノー」という声を上げられない、戦後日本の復興と経済発展の勢いが、斐伊川を変え、子供達から斐伊川を奪った。

（Ⅶ）原子力環境センター

島根県には原子力発電所がある。この保環研から然程遠くないところに其れ（＝島根原発）はある。運轉開始は1974年、全国で6番目、西日本では最初原発である。

原発から漏れ出る可能性のある放射能から住民を守る為に、平時に於いては、環境中の放射線量を四六時中チェックし続けて行く必要がある。その目的の為に、原発周辺の11カ所にモニタリング定點を



写真17 江角周一センター長。



写真18 生田美抄夫専門研究員。

設置し、2分毎に最新データを取得し、保環研の原子力環境センターで24時間集中監視するシステムが稼働している。



写真19 所内一室のガラス窓に投影された放射線量率定點観測リアルタイム情報。

それだけではない。島根県は、日本全国の中で、北朝鮮に最も近い県であることにより、2006年10月9日に北朝鮮が地下核実験を行ったと発表した際には、県東部の松江市と県西部の益田市の二カ所で、空間放射線量率の測定、環境試料（例えば雨）中の放射性核種の分析、及び野外草地等に於ける放射性核種の測定を、文科省から「やめてよし」の指令が出るまで実施し続けたという。幸いにして、斯様な分析結果から「北朝鮮地下核実験の影響は皆無」と判断するに至ったが、同様のことは何時復た勃発しないとも限らないから、島根保環研の放射能モニタリングシステムは、ただ単に域内の中国電力島根原発だけでなく、近隣諸国からの「核の脅威」の監視

装置としても機能し得る譯である。

上述の如き平時の備えに負けず劣らず重要なのは、非常時に於ける対応である。一旦緩急あった場合には、定點で受動的に観測を続けるといった悠長な構えは許されず、必要な装備をし必要な道具を車に積んで然るべき場所へと出掛けていかねばならないが、此處保環研には其の備えが完璧に出来上がっている。SF 映画のセットではないところが、悲しい。



写真 20 緊急出動用ユニット。

(Ⅷ) 小雨振り続く中、島根保環研を辞去し大橋川畔で反省會

島根保環研は、豫期した通り、頗る眞面目で勤勉で實直な人々の集合體だった。やることが徹底している。手を抜かない。しかも、そういうことが自然に出来ていて無理がない。

それは縣民性の然らしむところなのかもしれない。だとすれば、島根縣人の末席を汚す探訪子にも希望がある。今宵、眞夜中に突然目覚める私に「島根縣人の勤勉本能」が降臨し、猛然と明日のスライド準備を開始するであろう己の姿を期待し夢想し、それまでの間は安心して盃を傾けることにした。

おわりに

愛する島根縣がいとおしくてしかたない。あんなに子供達が澤山いた島根縣が今や「全國一の老人縣」になってしまっている。万古不易、何事も無かったかの如く沈黙し続ける宍道湖さえも、時にカビ臭という下品な愁訴を以て我々に異變を告げる。太古にはオロチ族が製鐵を営んでいた島根縣で、今は現代のオロチ族が原発を営んでいる。

嗚呼、矢張り島根縣は他の先生に訪問して貰うべきだったと後悔するも時既に遅し。取材を終えた直後は然程でもなかったが、いざ訪問記を書く段になってから頻りにその思いを強くし、擲筆目前の今は一層痛切にそう思う。探訪記を書くには私は島根縣を知り過ぎていた。しかも、知り過ぎていたのは昔の島根縣であって今のではない。

..... 昔はよかった

否、それは矢張り老殘探訪子の繰り言に過ぎないだろう。今の人間は昔を懐かしみ、昔の人は其の亦昔を懐かしむ。しかし、島根保環研の方々は、そんなこと百も承知で、今の島根縣に取り組んでいる。私情と妄念と駄辯に満ちた探訪記になってしまったことを心から御詫び申し上げる。

故郷を書くことが斯様なまでに辛い作業であるのだと知った探訪子は、橘部長室でそうしたように、今も石飛調整監の姿を探している。..... いや、そう



写真 21 昭和 29 年(1954 年)頃、七夕(旧暦)には
斐伊川で硯や筆を洗う習慣があった。
撮影三代忠雄。出典²⁾

ぢゃなく、本當に逢って話したい相手は野尻かもしれ
ない。

(探訪子 = 三代俊治)

参考文献

- 1) 島根縣衛生公害研究所編. 21 世紀へのいしずえー50 年

の歩みー. 2000 年 3 月

- 2) 三代俊治編. Nostalgiaー昭和往景ー三代忠雄寫眞帖.
1987 年夏、大榮印刷、東京。

~~~~~

## <後記：宍道湖のカビ臭について>

本文に「臭いの原因はジェオスミンであることが  
わかり、湖底の泥からはジェオスミン産生放線菌が  
検出された」と述べ、恰も『放線菌犯人説』が確定  
しているかの如く書いてしまったが、それは探訪子  
の早トチリであった。正しくは「ジェオスミンを産  
生する非濾過性生物の存在は確實だが、その生物を  
最終特定するには未だ至っておらず、現段階では、  
或る種の藻類と放線菌の両面から同定努力を行って  
いるところ」である。探訪子の輕卒を島根保環研の  
皆様に御詫び申し上げます。

編集部註：今月号のこの島根篇は山陰シリーズの前編に相  
当し、後編は鳥取篇です。この二つは同時取材で行いま  
したが、編集部の都合上、同号に掲載することが出来ませ  
んでした。後編は次号に掲載いたします。